

あ・うん

金剛禅総本山少林寺広報誌

vol.
21

2012 弥生・卯月



東日本大震災から一年

日本を元気に、人に元気を
行動しよう拳士たち



・東日本大震災から一年・

日本を元気に、人に元気を 行動しよう拳士たち

1年前、東日本を襲った大震災は、被災地の人々の暮らしと心に大きな爪痕を残しました。今号では、震災直後から被災地支援を指揮する浦田武尚少林寺拳法グループ震災支援対策本部長(金剛禅代表)が今後の活動方針を語ります。また、渡辺司福島双葉道院長からは福島の実況報告を、さらに、複数の道院で協力し、継続して支援活動を行っている道院長・拳士からはメッセージを頂きました。

忘れられない言葉

陸前高田市でのボランティアに参加した拳士の声をご紹介します。

▼6月25日 小友町の漁師さん

ある漁師さんと一緒に畑に埋まっていたがれきの撤去と、運搬作業を行いました。たった二日間だけの活動のため、申し訳なく思いお詫びしたときのことです。漁師さんは、「遠方から皆さんが、見ず知らずの人のために、身を削って助けてくれる……。わしらは、あなたたちから『生きてみよう』という元気をもらっているんだよ」と声をかけてくださり、思わず涙が出ました。

▼6月24日 小友町のご夫婦

80歳過ぎのSさんのお宅は、小高

い山の上にあるにもかかわらず半壊し、壁には津波の跡がくつきりと残った状態でした。老夫婦は私たちに何をやってほしいとも言わず、「めしき、け」と言い、ごはんをふるまってくれました。そして自らの胸の内をしつとりと語ってくれました。話をじっくり聞く——こんな

▼8月3日 米崎町のご夫婦

ボランティアを終え帰り際、ご主人が泥で汚れたお孫さんの写真をいとおしそうに、それでいて残念そうに見つめていました。「汚れた写真の復元をお手伝いしましょうか」と声をかけたところ、「親切にありがとう。思い出はまたつくればいい。うちは一人の犠牲者もなく、元気に

暮らしています。それだけでありがたいことですよ」と。思わず胸の奥から込み上げるものを感じました。

▼6月24日 陸前高田市災害ボランティアスタッフマッチング班Nさん

ボランティアに訪れるたびに必ずあいさつに行くと、いつもにこやかに迎えてくれます。両手でがっちり握手を交わし、「また来ました」「待ってたよ。ありがとう」と一瞬にして心がつながります。センターでは、「少林寺拳法の皆さんのお気持ちに感謝します。私たちは皆さんを仲間と思って心配しています。決して絶対無理をなされませんように」と、優しく包み込むような温かい笑顔で私たちにエールを送ってくださいました。

震災ボランティアについて

3月11日より、岩手県陸前高田拠点での活動を再開します。宿泊、食事のほか、ヘルメット、安全靴、長靴、各種道具類を備えています。参加した拳士は様に継続の必要性とボランティア人数の不足を感じています。ぜひ、道院や武専の仲間でご参加ください。

なお、事前に各地の社会福祉協議会にて、ボランティア保険に加入してから現地入りするようお願いいたします。

①陸前高田の最新情報は、畠山誠埼玉入間道院長のブログをご覧ください。

[少林寺拳法復興支援陸前高田チーム](#)

②ボランティア参加に関するお問い合わせは、支援対策本部まで。

【支援対策本部支援部門】

香川県多度津町 0877-33-2020

向田弘之、片山真司

h-mukada@shorinjikempo.or.jp



修行の意義を問う

3・11東日本大震災の被災地支援のため、1年間にわたり少林寺拳法グループの拳士、関係者によるさまざまな活動が展開されました。

世界各国の拳士から寄せられる義援金、見舞いや応援メッセージ、国内の大会や行事、街頭での募金、本山施設への入居支援、現地での炊き出しや支援物資の輸送、ボランティア(延べ2000人)などが、震災直後から継続されてきました。これらの活動を通して、命のありようや連帯の絆を強め、行動することの尊さを改めて知ることになりました。

翻って、このことは私たちに修行の意義を問い直すきっかけにもなったのではないのでしょうか。

開祖が逝去された1980年の12月に発行された臨時増刊『世界画報』に次のような記述があります。

「……少林寺拳法を修行することによって、人間存在の尊厳を見いだし、真の自信を身につけるとともに、他人を立て、助け合うことを覚えて社会正義のために身を挺すべく行動力を養う……これぞ開祖の言うところの行というものにほかならない」

震災から一年がたった今も、被災地では、まだまだ人の手や物心両面

の支援が必要です。一方、世の中の被災地への関心はだんだんと薄れていく恐れもあります。

今こそ、少林寺拳法グループの本領を発揮するときです。被災地のことを決して忘れず、支援のためにみずからできることを探し、行動していきましよう。

くしくも祖国復興を願った開祖生誕から100年目にスタートした支援活動です。「日本を元気に、人に元気を」を旗印に、他者のために私たちが澆刺(はたら)と行動していくことが開祖の遺志を継ぐことであり、理想境建設に向けた確実な一歩であると確信します。(浦田武尚)

福島双葉道院 渡辺司道院長

強き心で町へ戻る日を待つ



一時帰宅で戻った町は、これが自分たちが住んでいた所かと目を疑うようなゴーストタウンでした。

3月11日の地震発生時は、家の下敷きになるかと思うほどの激しい揺れで動きがとれず、柱につかまっていたまま揺れが収まり外に出ると、瓦が落ち壁にヒビが入り、家の中もひどいありさまでした。ライフラインは機能麻痺になりその日は余震で寝つけないまま過(こ)しました。

翌日、町の広報車から南の方へ逃げなさいと繰り返し放送があり、2、3日くらいと思いつても持たずにいわき市へ逃げました。妻の姉の家に2泊し、15日に原発が爆発したことを知りました。白河道院の部道院長のところに電話をすると快く引き受けていただき、1週間ほど道院の事務室にお世話になりました。この間、各地の道院長・部長、友人、知人から安否の電話を頂き励みとなりました。

その後、娘のところへ身を寄せ、初めての東京へ。約1か月を東京で暮らした後、今はいわき市で仮住まいの生活です。少林寺拳法グループからの救援物資、義援金は本場にありがたく、各拳士にも支給されました。現在、放射線量は少なくなっているとのことですが、汚染廃棄物の処理など問題があり、各首長がどう判断するかです。家に戻れる日まで、強き心構えで対応していきたいと思えます。春には始まるであろう各地区での除染作業には、自分たちも先頭を切ってお手伝いをしていきたいと思います。

義援金について

2011年10月14日現在、37,790,000円が集まっています。各都道府県連盟と連携をとりながら有効に活用させていただいておりますので、今後も継続してご支援をお願いいたします。詳細は、少林寺拳法オフィシャルサイトをご覧ください。

桜ライン311プロジェクト

陸前高田市の津波到達点上に桜を植樹し震災の教訓を後世に伝えるプロジェクトで、同市の青年会議所が中心となり進められています。協力内容は、①植樹関連作業ボランティア、②協賛金、③苗木の提供などです。グループ対策本部はこのプロジェクトを応援します。

問い合わせ・詳細情報は下記サイトをご参照ください。

▶桜ライン311実行委員会

<http://sakura-line311.org>

▶少林寺拳法復興支援陸前高田チーム

<http://syorinjiruma.blogspot.com/>





三重多気道院 乾秀樹道院長 最低5年間は 活動を続ける

支援Tシャツ制作販売による募金活動、支援物資やメッセージ、被災地での支援活動など、三重県少林寺拳法連盟の仲間と その時々で必要とされる活動を行ってきました。現在は、陸前

埼玉入間道院 畠山誠道院長

一人の小さな一歩が 生きる望みを繋げる

被災地には津波2日後に入り1週間個人的に活動しました。ただ、想像を絶する被害状況に、約60年生きてきた意味すべて否定され奈落の底に突き落とされた気持ちになりました。

三軒茶屋道院 小堀啓史拳士

365日分の1日 いい、支援に力を

三軒茶屋道院では、震災後すぐに道院としての支援活動の立ち上げを決め、4月は多賀城市拠点へ、5月以降は毎月、陸前高田市の拠点で活動させていた

高田市を中心に漁協のカキ養殖の丸太材を三重県の山2か所で間伐作業をしながら支援しています。山の自然を守りながら海に役立つ活動です。同時に埼玉県連や地元の方々とともに、陸前高田市の山の間伐作業も始めています。こうした活動には、阪神淡路大震災のときに共に活動した道院長や拳士たち

が協力してくれています。活動の中身は今後も変わり続けるでしょうが、できることを自分で見つけ、現地の方々と言葉や笑顔を交わしながら、目に見える支援を進めていくつもりです。支援活動は自分の価値観や人生観を見つめ直す作業でもあります。どちらが助けているわけでもなく、生かされている意

味、その喜びと苦しみを感じながら、でも一歩一歩進んでいくにはどうしたらいいのかと自問自答しながら進めています。誰もが同じことをする必要はありません。自分なりを見つけていることが大切だと思います。とりあえず5年間活動を続けようと思っ合っています。皆さん、できることを探して動きましょう！

とにかく自分のできることをやるしかない。その思いから自分の故郷陸前高田市に集中しようと思いました。一人では何もできません。そのとき、少林寺拳法の組織に力を借りようと思ったのです。陸前高田市の集会所を借り、拠点として活動できるようにし、市およびボランティアセンターと今後の連携に

ついて調整しました。4月28日に第一陣のボランティア活動を開始し、それから毎週、欠かすことなく全国から多くの拳士、関係者の方が参加してくれました。幸い大きな事故もなく、統制のとれた整然とした活動は、ボランティアスタッフにも被災地の方々にも高く評価していただき、信頼関係もでき

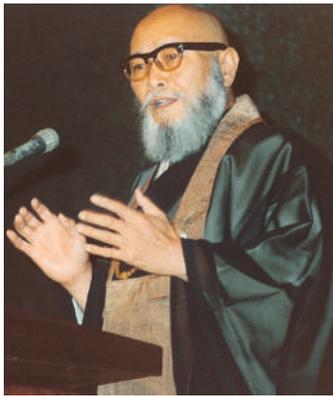
ています。今後ますます期待される団体となっています。被災地は陸前高田だけではありません。どこかで誰かの力を必要としている人たちは大勢います。どんな形でもこの被災地でも、たった一度でもいい、誰かのために一歩行動していただきたい。それをきっかけに生きる望みを繋げる人がいます。

心となつていますが、道院OBや所属拳士が監督をしている慶応義塾大学理工学部や明治学院大学の学生、さらに近隣道院の方々へと支援活動の輪が広がっています。また、現地活動への参加が難しくても志ある方々から多くの資金を提供していただき、各拠点へ安全靴や食料などを多数送ることができました。

これからも継続的に息の長い活動を行っていく考えです。活動立ち上げの際の、「一人ひとり、たった365日分の1日のでよいので支援に力を貸してほしい。皆がそうして活動すればものすごく大きな力になると思っています」という上野和博道院長の言葉、また、畠山埼玉入間道院道院長の「楽しくやっ

てくれればいいんです」との言葉に重石が取れる思いをした人も少なくありません。細く長くても被災地に気持ちを寄せ続けることが復興の道には一番必要だと思えます。できることを続けていこうという輪を広げていけたらと願います。皆の気持ちですが、大きな力に繋がっていくことを信じています。





開祖語録 ダイジェスト

1975年8月9日
第2次指導者講習
会(第1日)

私が欲しいのは少林寺のためではない、民族や人類の幸せに役立つような、指導力のある指導者になれるような若いものが欲しいんであってね、人間の数が欲しいんじゃない。ザコは100匹集まってもザコだ。クズはクズです。影響力のある、指導力のある数人の人間がいかに重要であるかということを私は言いたい。

諸君は縁があつて私に直接会つて今話を聞いておる。この時間、居眠りなんかすな、もつたいない。眠たいんだつたらさつさと帰れ。
私はこんなに1000人も集まつてくれんていい。10人でも3人でもいいんだ、本当にわかつてくれるやつがおれば。

私が欲しいのは少林寺のためではない、民族や人類の幸せに役立つような、指導力のある指導者になれるような若いものが欲しいんであってね、人間の数が欲しいんじゃない。ザコは100匹集まってもザコだ。クズはクズです。影響力のある、指導力のある数人の人間がいかに重要であるかということを私は言いたい。

君たちは機関車になれ

私が本心に欲しいものは、そうやって人を引っ張っていき、人を動かせる人間なのである。勇気もあり、行動力もあり、またみんなを引っ張っていけるような、すばらしい青年でなければならぬ。人の上に立ち、人を引っ張っていくんだつたら、君たちは機関車になれ。

清風

vol.21 宗務局長 田村 明

揺るぎない自信と 真の誇りを

われわれは「自信と勇気と行動力」という言葉をよく使う。

「金剛禪指導者に求められる条件」の中に「信仰・信念の確立」「不正に対する怒りと行動」など具体的な言葉がある。行動するには勇気が必要だ。また勇気を奮い立たせるには、揺るぎない自信の裏付けでなくてはならない。みずから正義の行動をとるためには、何に基づいた自信が必要なのだろうか。それは今までの

学びや体(行動)に染み込んだ金剛禪の教えであろう。長きにわたり修行を積んでいる証しが「武階」であり、また教えを学び続けている証しが「法階」であり、さらにこの教えを世に広め、人に生き方までをも説いている証しが「僧階」である。心に恥ずべきことのない揺るぎない自信があればこそ、誇り高く胸を張って生きることが出来る。そして後輩は先達(布教者)のそのような姿を見て育つ

のである。
道訓の中に「凡そ人心は、即ち神なり仏なり、神仏即ち霊なり、心にはずる処なくば神仏にもはずる処なし……」とある。神仏は自分の心の中にある。自分に恥ずべきことのない心を持つなら、仁・義・忠・孝・礼を為せと説く。それが人間の靈性を最大限に発現するのである。われわれは何とすばらしい教えの中にあることだろう。

たった一人の宗道臣が日本へ帰つたことよつて今日、この少林寺のすばらしい組織と、人と建物が動いてるんです。またインドネシアから日本へ留学し、天理大学の講師をしておつたインドラ・カルタサスマタという、たった一人のインドネシア人がね、本国へ帰つたということが一つの原因となつて、インドネシアの少林寺拳法は今、発展を続けて支部がすでに200できておる。

私が本心に欲しいものは、そうやって人を引っ張っていき、人を動かせる人間なのである。勇気もあり、行動力もあり、またみんなを引っ張っていけるような、すばらしい青年でなければならぬ。人の上に立ち、人を引っ張っていくんだつたら、君たちは機関車になれ。

遥かなる釈尊(下)

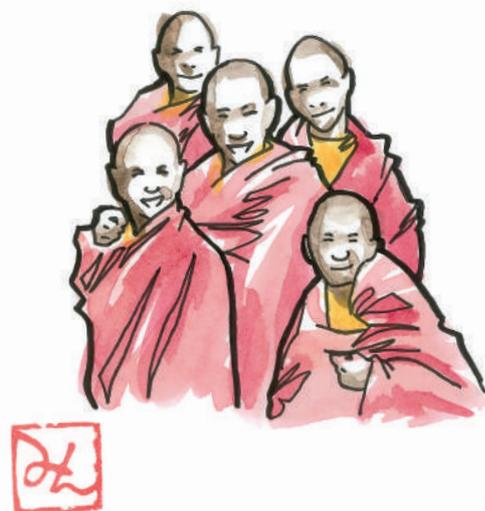
日本は近代西欧化の中で学問や宗教もまた強い影響を受けた。従来の北方仏教に代わって現れたのが、西欧からの文献学的仏教である。特にインドの宗教言語の研究は、釈尊在世の初期仏教の探求に大いに役立った。釈尊が直接弟子たちに語った言語を想定させ、釈尊の姿が生き生きと映し出されてきたのだ。明治以前、漢訳仏典でしか仏教解釈をしてこなかった日本人にとって大きな衝撃となった。そして日本語の仏教聖典を持たなかった日本人には、サンスクリット語、パリー語の仏教聖典の翻訳が、漢訳仏教とは違う新たな視界を開かせたのである。

文献学的仏教研究の基礎を築いたのは、南條文雄、高楠順次郎らである。そして、木村泰賢が『原始仏教思想論』、姉崎正治が『印度宗教史考』などを著した。一方、和辻哲郎は『原始仏教の実践哲学』を、中村元は『インド思想史』などを著し、比較思想的研究など独特の仏教研究を展開した。開祖は『教範』の参考書目にこれらの著作を掲げている。釈尊の正しい教えを究明するうえで、深く原始仏教に関心を持っていたことが窺える。

西欧の仏教研究の対象は原始仏教であった。原始仏教とは、釈尊の初めから、仏滅後100年ごろ、部派に分裂するまでの、または西暦前3世紀のアショーカ王時代ごろまでの、インド仏教初期の段階を指す。原始仏教の中心的な教理は、最初の説法でなされた四諦、八正道、縁起、五蘊の無常・苦・無我などである。

戦前、こうした釈尊の根本的な教理研究を踏まえた「釈尊に還れ」という仏教運動が起こった。その旗手となったのが友松圓諦である。友松は早くから仏教経済思想の研究に精通し、現実の仏教教団のあり方を痛烈に批判し、本寺末寺関係を持つ各宗派教団の統合など大胆で革新的な提案をしていた。そして東京を根拠地に1935年、全日本真理運動本部を組織し、機関誌『真理』を発刊、大阪にも支部を結成し、盛んに講演をしている。

さてこのころ、開祖は『正史』によれば、各務原飛行場を除隊の後、大阪に移住し結婚、1936年に大阪北区役所に婚姻届を出したとあるから、当時、頻繁に行われた大阪での友松の講演を聞き、機関誌『真理』を購読する



など何らかの触発があったのではないかと察せられる。その意味で、開祖が『教範』46ページに、『真理』十一の一(1936年1月号)に載る友松の論説「祖先崇拜をこえて」を掲げ、同調したことは実に興味深い。また、戦後も戦前に引き継いでラジオ放送された友松の「法句経講義」も聴講していたようである。

開祖の『教範』第一編の「宗教とは何か」から「正しい釈尊の教え」までの、一連の日本仏教への批判的アプローチは、上述した原始仏教の諸研究に立脚したものであることがわかる。開祖の宗教遍歴は中国・日本での体験が主なものであったとされるが、こと釈尊達(ちやく)への道程は、かなり長い期間にわたる自身の苦悩と自問の繰り返しのおかげになされた、学究的なものであったかと思料されるのである。

道

津田
武尚

拳禪一如の道

弘前城北道院 相馬十九三道院長

1963年5月、少林寺拳法に出会い、技の魅力に惹かれた。そして開祖(管長)を知り拳禪一如の道を通して教えとしての金剛禅を学び、開祖の生きざまと信念を見聞することができた。開祖の全身全霊を込めた人づくりに懸ける「志の高さ」と「思いの強さ」が人を惹き付け、開祖に共感していく先輩方の背中を見て自分もと思い、いつしか仲間として歩いてきた。開祖だつて心臓発作を抱えているんな悩みがあったと思う。療養して一縷の望みに懸けるといふ選択肢もなかったわけではないと思うが、少林寺拳法の創始者、第一人者として「ワシは壇上で死ねたら本望だ」と最後の最後まで金剛禅を伝え、「人間死ぬまで修行だ」と言つて、そのとおりの実践をみずからして見せた。この姿を目の当たりにしたすべての拳士が気力を充電させて奮い立ったものである。言い続けたのは、「一生懸けての『人間完成の行』修行に終わりはしない。金剛禅指導者としての向上を目指し、みずから成長していくにはどう行動しなければならぬのか。真の指導者を目指せ」と、この「魂」の叫びがわれわれに「人づくりの道」への使命感

と組織的団結、結束力を生ませたのである。「年々歳々、新たな発見や閃きを目指し、みずからの可能性を信じて努力し続け、尽きることのない道を歩もうではないか」という呼びかけに、身震いをするほどの感動が身体の中を流れたことは忘れてはなるまい。

一歩一歩、一日一日の積み重ねが1週間であり、1週間の積み重ねが1年、2年と続くのである。この積み重ねが漸々修学の道なのである。われわれにとつて身近なりーダー像といえれば開祖である。今、少林寺拳法があるのは開祖が仕立てた金剛丸という船が航海しているからである。船の行き先は決まっている。われわれはこの船に乗客としてではなく開祖の「志の高さ」に感化され、みずから漕ぎ手として志願し、船に乗ってきたはず。だとしたら船を泊まらせたり、方向を変えることなく次世代の漕ぎ手にキチツとバトンタッチすることがわれわれに残された仕事といえる。

今、拳禪一如の道を歩いてきて何が得られたかと問われれば、一、人間完成に向つて前向きに取り組む向上心。二、ダーマの分霊としての人間の本性の覚醒を修行によって捉え

る求道心。三、困難があればこれを乗り越えようとすゝる不撓不屈の心。四、苦難があればつらさを我慢して止むのを待つ忍耐の心。五、自他共楽として半ばは相手のことを考えられる心。だといえる。司馬遼太郎の本の中で「志」について書かれているのがある。男子の価値は「志の高さ」によって決まるが「志」を貫き通すことがいかに難しいことか。大義に生き、大義のために命を捨てるという生きざまを通すことはその道を突き進んだ人にしかわからない。そしてその志の高さをいかに貫き通すかという工夫は格別なものではなく、日常茶飯の自己規律にあるという。箸の上げ下ろしにも、物の言い方、人とのつきあい方、息の吸い方、息の吐き方、酒の飲み方、遊び方、ふざけ方、すべてが志を貫き通すための工夫によつて貫かれておらねばならない。

大事の前の小事という諺があるが、大事の前にはどんな小事も油断するなどの意味であり、「志」を貫き通すには最も必要なことだといふのである。開祖の遺された拳禪一如の道は漸々修学の道であり、己の「志」を貫き通す道でもある。

ダイジェスト



志をつなぐ

vol.6

かきぬま みのる
柿沼 實 198期生
少法師正範士七段

護身のためにと始めた少林寺拳法でしたが、いつの間にか指導する立場になっていました。開祖からは、「高校生というものは、思春期の最も多感な年代で、君のひとりで後の人生が変わる時期だ、頼むぞ」というお言葉を頂きました。「人、人、人、すべては人の質にある」という開祖の教えは、とても深い意味のある教えです。

指導者のひと言が与える影響と重み すべては人の質にある

一人でも質のよい拳士を世の中に送り出すとともに、周りの人間による影響を与えられる指導者になる修行をしなければならぬと、開祖は論されたのだと思います。私にこのようなすばらしい影響を与えてくれた金剛禅という絆に大なる感謝をしています。

※プロフィールや開祖の思い出など、金剛禅オフィシャルサイトの全文もぜひご覧ください。



立つ鳥跡を濁さず。残された後の人が困らないようにと、すべての写真を整理し、手放してしまった柿沼氏。残っているのは写真データになったこの1枚のみである。

ダイジェスト



道院長 元気の素

vol.6

さっぼろへい わ
札幌平和道院
道院長 齊藤敏也 (50歳)

「青春」とは人生のある期間をいうのではなく、心の様相をいうのだ。優れた創造力、逞しき意志、炎ゆる情熱、怯懦を却ける勇猛心、安易を振り捨てる冒険心、こういう様相を青春というのだ。年を重ねただけ

「青春」のモチベーションを持つて 道院長を目指しましょう！

——将来指導者を目指す全国の拳士にエールをお願いします。サミエル・ウルマンの「青春」という詩のくだりをご紹介します。「青春とは人生のある期間をいうのではなく、心の様相をいうのだ。優れた創造力、逞しき意志、炎ゆる情熱、怯懦を却ける勇猛心、安易を振り捨てる冒険心、こういう様相を青春というのだ。年を重ねただけで人は老いない。理想を失うときに初めて老いが来る」。私は42歳で道院長になりました。当時は年齢的に遅い決断かとも考えましたが、今でもこの決断は正しかったと確信しています。今後この詩にあるような強い意志と情熱を忘れず指導に取り組んでいきます。

※プロフィールなど、金剛禅オフィシャルサイトの全文もぜひご覧ください。



葛城東道院

みんなの笑顔が被災地の勇気に！

2011年10月23日、かつらぎ総合文化会館で東日本大震災復興支援チャリティコンサートを行いました。

5道院5少林寺拳法部とかつらぎ町内の15団体の協力で開催。約1000人の観客が集まり、前売り券、当日券合わせて合計117万932円の義援金を多賀城市災害対策本部に送金することができました。

また、併設したフードコーナーでは各種どんぶりやフード、ドリンクを販売し、その売上金15万7923円を台風12号による被害があった和歌山県に、県連経由で被災地の道院長に送金することができました。午前中の第1部は地元のダン



スチーム、和太鼓チーム、吹奏楽団やパフォーマーダンス書道などが出演し、ほぼ満員の観客を喜ばせていました。午後の部一番は、特別講師として澁谷大司多賀城城南道院道院長をお招きして特別講演を行いました。震災当時の様子や失敗談、嬉しかったことなど、これから南海・東

南海地震を控えているわれわれ和歌山県民としては、本当に勉強になった講演でした。続いて第2部では、少林寺拳法の各団体による演武発表、第3部は、葛城東道院の有段者拳士30人と和太鼓のコラボレーション演武へと続き、満席の観客席から大歓声が上がりました。

会場内には寄せ書きコーナーも設置し、東北および和歌山県の被災地へのメッセージを届けることができ、イベントは大成功に終わりました。(下村清隆)

広島県教区

入門式・達磨祭を 実習で学ぶ

12月4日、広島県教区研修会が行われました。研修会は5回目となりますが、今回は実習です。坪井事務局長の進行により始まった研修会では、瀧本広島県教区長が導師となり入門式・

達磨祭の実習が行われました。門下生を新入門者に仕立てての入門式の実習は、会場の都合で献香はできませんでしたが、「儀式要領」に則り進行了しました。

「教典唱和は時間の関係で省略しましたが、「表白文奉読」、「誓願文奉読」が行われ、導師の動きや心構えなどを細部にわたりに指導されました。引き続き「入門者紹介」、そして「導師法話」では、入門者が思い出に残る話をする必要と説明があり、また以前行われていた盟杯の話や、入門式の思い出など参加者を交えて討議が行われました。特に、スポーツ少年団・

高校・大学での入会式はどうあるべきかなどの話も出て、建設的な意見交換がなされる有意義な実習となりました。続いて、達磨祭の実習も同様に行われ、厳正な実習の中にも心が和む研修会となりました。(瀧本保夫)

三重上野道院

護身術教室で道院に 触れ親しんでもらう

12月14日、岡波看護学校の学生を対象に護身術講座を行いました。岡波看護学校は道院から徒歩15分くらいのところにあ

り、当道院に岡波病院に勤務する拳士や看護学校の手話サークルを指導している拳士がいたため、今回の講座開催につながりました。参加学生は60人。

相對練習やミットを使った実習、投げ技なども披露し、少林寺拳法初体験を楽しんでもらえるような指導を心がけました。若く元気で真面目な方たちで、積極的に質問したり、逆技を掛けてほしいと手をつかんできたり、楽しんで練習に取り組んでいました。引率の先生も参加し、技をリクエストしたり、道場の中を興味深そうに見学したりされていました。

入門希望の声もあり、道院に来てもらい、道場の場所や雰囲気を知ってもらったことは布教に大いに役立つようです。(南出哲男)

清水袖師道院

「新年の誓い」を発表 目標達成に協力する

1月6日、清水袖師道院にて新春法会を行いました。今年も、導師献香、教典唱和の後、拳士一人ひとりがあらかじめ書いておいた「新年の誓い」をみんなの前で発表する形をとりました。これは、新年の初め



に一人ひとりの掲げた目標を全員で確認し、それぞれの目標達成にみんなで関わり協力していくという意味です。東日本大震災の勉強を昨年はずっと行ってきましたので、今年は一人ひとりが努力するというだけでなく、協力していく年にします。関わり合いながらよりよく変化をしていくというのはダーマの働きそのものです。

道院長年頭挨拶では、OBやOGからの年賀状を紹介し、現実的で前向きな努力をしながらその輪を広げていきたいと法話を行いました。奉納演武は年末の演武発表会で熱が出て参加できなかった少年部拳士に、元氣いっぱい発表をしてもらいました。記念写真撮影の後、保護者の方も車座になって和やかな雰囲気の中、ぜんざい会食をしました。(平井富士雄)

2012年勤続表彰

(順不同)

●50年

西内 一(千歳道院)
田原 正晴(岡山光南道院)

●45年

加茂 雅久(尾張守山道院)
森川 是汪(洛東道院)
平野 隆洋(泉佐野道院)
松井 邦彦(大阪池田道院)
木下 光治(板野道院)
近藤 功(阿波久勝道院)
竹尾 朝寛(中津道院)

●40年

内田 弘志(霞ヶ浦道院)
小林 信義(増徳道院)
村川 孝(富山宏徳道院)
速水 信之(名東道院)
小川 和久(紀伊長島道院)
牧田 章一(京都堀川道院)
藪野 実(大阪藤井寺道院)
松下 邦義(大阪東道院)
東 豊俊(播磨山崎道院)
安田 善次郎(白檀道院)
野際 利雄(和歌山北道院)
中込 秀彦(福山南道院)
佐々木 真人(宇部道院)
久保田 利幸(那珂川道院)
松岡 孝徳(人吉道院)
仲西 哲男(延岡道院)

●35年

池上 治男(砂川道院)
山崎 勝(函館東道院)
相馬 十九三(弘前城北道院)
本山 伸一(気仙沼道院)
鈴木 信一(酒田中部道院)
茂木 宏一(茨城石岡道院)
鈴木 裕(水海道道院)
宮嶋 由雄(千葉印西道院)
菅谷 昭(下総中部道院)
村上 喜久(東京飛鳥道院)
道下 英裕(町田道院)
荒木 誠吉(神奈川大和道院)
遠藤 八郎(横浜山元道院)
小川 肇(横浜瀬谷道院)
山口 晴一(横浜雅道院)
安田 恒雄(金沢文庫道院)
小磯 信一(神奈川嶽之内道院)

安宅 政孝(三浦三崎道院)
宮本 繁(長野更埴道院)
谷本 省三(岡崎六ツ美道院)
鈴木 晴雄(豊川道院)
森川 辰幸(名古屋道徳道院)
中村 政次郎(名南道院)
山口 博正(名古屋緑道院)
小林 秀行(四日市港道院)
増田 喜昭(四日市こだるま道院)
中野 新三(貝塚道院)
中矢 富数(八尾志紀道院)
佐々木 正(大阪白鷺道院)
田中 隆造(姫路手柄道院)
小林 清和(姫路東道院)
西川 雅廣(磐余道院)
山崎 隆尉(岡山灘崎道院)
馬場 辰己(笠岡道院)
榎田 光男(尾道道院)
近藤 悦朗(松山中央道院)
野崎 勝威(高知港道院)
氏次 五雄(高知日章道院)
森山 廣平(福岡大川道院)
下川 正春(佐世保道院)
杉田 幸治(湯布院道院)
是沢 利秋(日向細島道院)

●30年

加藤 忍(釧路鶴舞道院)
原 宏(八戸東道院)
石井 利直(渡良瀬道院)
田中 一彦(草加道院)
古谷 進(市川若宮道院)
頭久保 武司(東京小平道院)
武田 俊治(国立道院)
上野 和博(三軒茶屋道院)
永原 秀之(東京志茂道院)
大澤 隆(石神井東道院)
鈴木 康夫(横浜清水ヶ丘道院)
山本 佳廣(甲府南道院)
家田 正三(愛知安祥道院)
金原 正之(新城中部道院)
中曾 英明(名古屋柴田道院)
北村 光拡(尾鷲北道院)
三輪 和行(三重菰野道院)
羽角 隆(近江木之本道院)
田畑 等(東貝塚道院)
吉川 芳男(大阪港道院)

中林 秀明(神戸兵庫道院)
奥道 榮三(赤穂東道院)
出立 正則(和歌山打田道院)
樹野 象堂(光峨嶺山道院)
赤川 孝晴(久留米北道院)
山口 義人(大川内道院)
四元 光司(薩州天文館道院)

●26年

北向 勉(みちのく下田道院)

●25年

遠藤 栄一(鹿児島種子島道院)

●21年

松浦 牧男(宮崎聖陵道院)

●20年

野坂 政司(大麻麻の実道院)
菊地 孝行(福島浅川道院)
米地 明彦(茨城守谷道院)
辻 新滋(千葉川戸道院)
林 憲作(船橋薬園台道院)
前田 保男(東京大泉道院)
安藤 純一(東京上北沢道院)
福元 耕一(横浜鶴見道院)
黒田 幸明(湘南六浦道院)
河本 章(神奈川成瀬道院)
浜谷 典明(鯖江北野道院)
田村 昌夫(佐久平南道院)
高野 多喜雄(伊豆河津道院)
磯谷 啓司(一宮富士道院)
米住 治男(愛知長草道院)
坂井 鋼一(名古屋平針道院)
鈴木 豊(金山西道院)
倉田 伊三(滋賀甲賀道院)
吉岡 暁(京都峰山道院)
角田 博行(龍野道院)
久原 久己(姫路八幡道院)
楨田 浩司(広島御調道院)
滑田 信夫(脇町道院)
下河 典昭(大牟田東道院)
久保田 秀利(那珂川北道院)
花見 充(北九州八幡道院)
竹尾 五十志(福岡春日西道院)
松下 政見(福岡四王寺道院)
林 勝男(小倉足立道院)
野間口 政則(福岡早良西道院)
木野 日太(小倉日豊道院)
坂口 勝浩(大村西道院)

本瀬戸 孝一(大分院内道院)

●10年

英 元弘(米沢道院)
三瓶 佳治(福島富岡道院)
石渡 静夫(龍ヶ崎南道院)
古谷野 好栄(つくば花畑道院)
草野 智広(埼玉鴻巣南道院)
木村 恭則(埼玉鴻巣東道院)
島崎 彰久(渋谷笹塚道院)
後藤 隆志(板橋蓮根道院)
白尾 國宗(東京羽田道院)
塚田 誠(中野西道院)
大家 正己(石川大聖寺道院)
藤井 新一(美の白川道院)
立花 圭(岐阜住吉道院)
上田 雅則(浜松東道院)
吉林 久幸(浜北東部道院)
後藤 久雄(榛南道院)
伊藤 直幸(静岡掛川道院)
福田 有希(浜岡道院)
藤崎 隆志(東海葵道院)
牧村 昌司(名古屋太子道院)
山下 研治(愛知浄水道院)
永岩 信行(愛知五ヶ丘道院)
木戸脇 捷三(滋賀草津道院)
堀 幸夫(京都洛西道院)
長野 享司(京都衣笠道院)
森下 明輝(茨木東道院)
吉村 雅至(奈良郡山城道院)
池山 卓(島根隠岐道院)
坂東 芳(徳島道院)
佐々木 隆(徳島加茂名道院)
久保 義則(高松東道院)
山本 俊二(松山城東道院)

少林寺拳法グループ表彰

砂野 芳弘(多賀城道院)
鎌田 礼二(宮城塩竈道院)
皇山 誠(埼玉入間道院)
神奈川県少林寺拳法連盟
新潟県少林寺拳法連盟
関東学生少林寺拳法連盟

少林寺拳法グループ感謝状

辛崎 鏡(象郷旭道院)
牧野 清(西陣道院)

お布施

▷西村光世 八代道院 20,000円
▷東京大塚道院 100,000円
▷山口義人 大川内道院
20,000円
▷義若和子 故義若名誉委員夫人
100,000円

▷山崎隆尉 岡山灘崎道院
30,000円
総本山少林寺改修基金
▷清晴美 東京大塚道院
30,000円

達磨祭御祝

香川県少林寺拳法連盟

新春法会御祝

金剛禅総本山少林寺東京都教区
金剛禅総本山少林寺徳島県教区
金剛禅総本山少林寺高知県教区

3月の本山行事

18日(日) 帰山

4月の本山行事

14日(土) 都道府県教区長研修会
／会議
15日(日) 帰山

編集後記▶気候の暖かさを待ち望んだ矢先の昨年3月11日、未曾有の大きな被災、人心の環境は1年後の現在、遅々とした進捗状態である。▶復旧・復興を目指し現地では絆を強めているが、政府による工程は相も変わらぬ政局争いの犠牲で遅延状態である。▶金剛禅総本山少林寺の門信徒として、継続的ボランティア活動で「自他共楽」、国づくりの実践に邁進していくことが開祖の教えを生かすことにつながる。継続は力なり! (あ)

表紙▶河合修 愛知県出身。日本を代表する写真家・藤井秀樹氏のアシスタントを経て独立。2009年5月より「ダーマ」をテーマに、『あ・うん』の表紙撮影に取り組む。ホームページは「写真家 河合修」で検索! 名古屋千種道院、中拳士三段。

金剛禅総本山少林寺オフィシャルサイト▶

<http://www.shorinjikempo.or.jp/religious/index.html>
2週ごとに更新される代表メッセージをはじめ、「宗門の行としての少林寺拳法」を動画でご覧いただけるほか、誌面に掲載しきれなかった記事・写真も掲載されています。

金剛禅総本山少林寺 検索

あ・うん | vol. 21
金剛禅総本山少林寺広報誌 2012 弥生・卯月

2012年3月1日発行(奇数月1日発行)

発行人: 浦田武尚

発行所: 金剛禅総本山少林寺

〒764-8511

香川県仲多度郡多度津町本通3-1-48

☎0877-33-1010

<http://www.shorinjikempo.or.jp>

編集人: 秋吉好美

企画・編集: 金剛禅総本山少林寺東京別院

〒170-0004

東京都豊島区北大塚2-17-5

☎03-5961-1400

e-mail aun@shorinjikempo.or.jp

印刷・製本: (株)ブル・ドック

※本誌の発行に掛かる費用には、SHORINJI KEMPO UNITY によるライセンス事業の収益金が活用されています。

広報誌「あ・うん」追加発送について ◇◇◇◇◇

現在、広報誌「あ・うん」を1道院につき10部ずつ(一般財団支部は1部ずつ)、毎号ご提供させていただきます。更に追加をご希望の方は本山宗務部にお申し出ください。(追加1部につき50円・送料別途要)

TEL.0877-33-1010

e-mail fukyoka@shorinjikempo.or.jp

いち ご いち え
一期一笑



イラスト/大原由軌子

行橋中部道院 田中克樹

32年ぶりの受験

「三段受験した思い出の『錬成道場』に32年ぶりに立ち感激でした」。行橋中部道院の利光大二郎拳士が、2011年9月、32年ぶりの昇段受験で四段に合格しました。

利光拳士は、1967年8月入門の第221期生。当時は実業団支部だった当道院の一期生に当たります。1979年9月に指導者講習会で初帰山した折に三段を受験し、以後休眠していました。2009年4月に、当道院の中村泰尚拳士が営む美術商を偶然夫婦で訪問したことがきっかけで、復帰することになりました。なお、中村拳士は広報誌『あ・うん』17号に登場する79歳で四段に合格した拳士です。

下と持病の腰痛を心配していました。2か月間の復帰体験期間を経て4月に正式復帰。そんな利光拳士の修行継続の励みになればと、四段受験を勧めたところ果敢に挑戦し、64歳直前で見事合格となったのです。

ちょうど32年ぶりの帰山となった利光拳士は、「当時は開祖がご存命でしたが、今回は開祖像に迎えていただき感慨深いものがありました。納得のいく受験内容および帰山となり、十分な満足感を得ています」と充実した特昇となったようです。30年間のブランクがあっても、いつでもいつからでも少林寺拳法はできます。高齢化時代ですが、何かを始めるのに遅いことはない、利光拳士は証明してくれました。

投稿大募集 道場や拳士のちょっとした話を募集しています。※ペンネーム可ですが、必ず、名前、所属、連絡先もご記入ください。なお、原稿内容の整理・編集をさせていただく場合があります。原稿の選択はご一任ください。〒170-0004 東京都豊島区北大塚2-17-5 東京別院 広報誌担当宛 TEL.03-5961-1400 FAX.03-5961-1401 e-mail: aun@shorinjikempo.or.jp

宗門の行としての少林寺拳法



Ryuka Ken, Tsuru otoshi
りゅうかけん つりおとし
龍華拳 吊落

吊落は送^{おくり}小手^{こて}を掛けようとしたときに、相手が後方へ回り込んで逃れようとした場合の変化技である。相手が回り込む刹那^{せつな}に、相手の背中から手を離すように吊り上げると、相手の肩関節が極められ、上体が前に落ち込み、投げることができる。なお、別法として、相手が振り向きざまに裏拳を振り打ってきた場合は、右手外押^{そとおし}受^{うけ}によって攻撃を封じ、その手を相手の肘内側^{ひじ}に引っ掛け、上方へ吊り上げるようにして投げる。(写真は別法)

撮影／近森千展 文／飯野貴嗣 演武者／守者：川島一浩 正範士七段 攻者：飯野貴嗣 准範士六段